

# 「いんなん」 しています。

## わだいのつじゆ

### 村絶の願い

川の氾濫源に水田を拓き、そこに生活と生産の場をつくってきた日本人。恵みの川は氾濫の歴史でもありました。洪水は、川のほとりで暮らし、米を作り、山と海をつなぎ川舟で物資を運びと、狭い国土で川と共に生きてきた日本人の宿命かとも思われます。

明治22年に西牟婁郡七川村に合併され、数戸の集落ながら昭和28年に人家が皆無となるまで存続していました。ではなぜ住民の伝承として災害廃村が語られるのでしょうか。

それは狭隘な環境のため災害が生活と生産困難に直結してきたからと推測されます。井野谷村は、廃村にしたかったが、許さなかつたのです。

古座川町最奥の平井の南西に井野谷という集落があり、江戸時代の災害で廃村になったと平井区の方が教えてくれました。それについて調べました。井野谷村は、行政上は

現在古座川町の七川からすさみ町の佐本を経て

# 廃村を許さず

海岸部の周参見への通路として重要なため廃村にはなりません。さらに天明8年(1788)の水害では地形が一変するほどに大荒れとなり、もはやこれまでと災害後に村を見回った役人に「村絶」の願いを出しますが、認められませんでした。宝暦4年は全国で洪水被害が相次ぎ、熊野でも「七月七八九日大洪水、古座、高川原、古田民家流、人四十人余流死す」、天明

8年には、「七月十七日、夜大雷雨諸方山崩る、那智谷大損し、人多死す(いづれも『熊野史』)とあり、古座川や那智川流域で甚大な被害が出たことが記録されています。災害後、井野谷村再生のために入植者に対し年貢免除期間を20年間、地起し飯料米として2石ずつ6年間下付されることになりました。しかし、貧村ゆえ入村の希望者はなく、平井村から2人が申しつけられ井野

### やむを得ない

つえる(潰える)とは崩れるとの意味があり、井野谷は「つえ谷」とも呼ばれていました。「墓も神社もあり、山崩れの後も一生懸命に田畑を作り直してきた。作ってもイノシシにやられ、夜中にアリキを叩いてイノシシを追い回した。子どもの仕事だった。かつての村の子の言葉です。過疎は厳しく、父や青年らはやむを得ず村を出た」。

「廃村を許さず」という時代の強い要請が見えなくなっています。現在が村に求める存在意義とは何でしょうか。日々の糧を得る以外の存在価値を認めながらも、「やむなし」と潰えてしまいたい。葛藤が続いています。



植林された旧井野谷集落



旧街道添いにあった井野谷村矢倉神社。岩神様を祀る

谷に入村します。ふたりは律儀者で9年間で3反ほど開拓。しかし過酷な状況は変わらな、もう1、2人入村すれば残りの開拓、猪鹿防ぎ、役人通行の村継ぎなどができるようになるので、さらに6年間、米2石ずつ

近しい平井に移り、当時は川の流通に頼っていた平井の道づくりにも精を出します。その平井区も近年は過疎が進み、地区の重鎮とな

## プロ フィル



湯崎真梨子(ゆざき まりこ)  
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授  
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。